Urban Design Lab. Magazine

東京大学都市デザイン（西村・窪田）研究室
工学部都市工学科／工学系研究科都市工学専攻
http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/index-j.html

編集長　：矢吹 剣一
編集委員：安川 千歌子　前川 綾音　村本 健造
石井 かおる　大森 文彦　北川 貴巳　松本 綾

都市デザイン研マガジン vol.162　2012.1.10

気持ちを新たに！ー笑顔があふれる１年となりますようにー

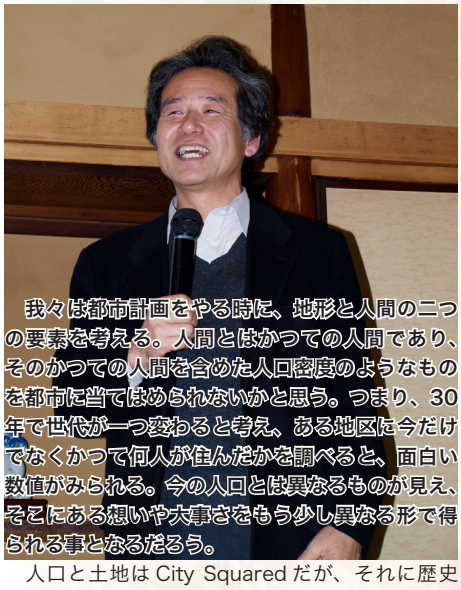
A Happy New Year!　–May You Have All Your Happiness of this Year–

新年あけましておめでとうございます。本年も都市デザイン研マガジンを宜しくお願い致します！
2012 年第一弾は、昨年 12 月 8 日（木）に本郷鳳明館にて開催された、毎年恒例の研究室忘年会での西村先生と窪田先生による、心に響く演説録をお届けします！

text_ishii

忘年会演説録

西村 幸夫　教授　「自信を持って今を深めれば、いつかは花が咲き見事な紅葉を迎える。」



我々は都市計画をやる時に、地形と人間の二つの要素を考える。人間とはかつての人間であり、そのかつての人間を含めた人口密度のようなものを都市に当てはめられないかと思う。つまり、30 年で世代が一つ変わると考え、ある地区に今だけでなくかつて何人が住んだかを調べると、面白い数値がみられる。今の人口とは異なるものが見え、そこにある想いや大事さをもう少し異なる形で得られる事となるだろう。

人口と土地は City Squared だが、それに歴史を重ねると “City Cubed” となる。我々が今いる所も建て替えられており掘れば沢山出てくるが、掘っている間はほとんど意識されていない。しかし、歴史の積層を理解できるため、こういうものを含めて都市を考えるべきだ。頭では解っていても今を生きる我々は今の事しか考えられないが、こういう歴史を見ると実感として分かるとつくづく思う。ある種の都市の負担を考えると、より説得力がありこの場所には何をしないといけないと言えるのではないか。

今年は様々な事があったので色々言えるのだが、身近な所で考えてみようと思った。皆さんもこれから色んな形で巣立っていくが、今日の話の色んな所を大事に持っていて欲しいと思う。

今ちょうどイチョウが盛りで東大構内も素晴らしいイチョウ並木となっているが、14 号館の前は未だ紅葉を迎えていないため大した事がない。あと二週間経つと今の正門前のイチョウの盛りは終わるが、パッと見ると 14 号館のイチョウがすごい黄色に色付く。

つまりこれは個性なのだ。ある時に盛る個性もあれば、後に光る個性もある。

これから皆さんが社会に出ていき、その時により、様々な事があるかもしれないが、自分のピークは各々の所にある。他人がピークを迎えて羨ましいと思う事もあるが、気にしないでほしい。自信を持って今を深めればいつかは花が咲き、イチョウのような見事な紅葉を迎えられる。それはどんな木にだって必ずあるのだから、他の事を考えずに自分の道を信じて進んでほしい。花が咲き、紅葉をし、その後は我々のようになっていくのです。

私も楽しく落葉しながら次の世代に色んな事を引き継ぎたいと思う。卒業式での話の様になったが、酔ったせいだから良しとして頂きたい。今、黄色いイチョウを見てそういう事を感じてもらえればと思う。皆さんの個性がそれぞれ花咲くことを期待しています。頑張って下さい。

▲2011 年 12 月 8 日（木）に開かれた忘年会での集合写真

窪田 亜矢　准教授　「穏やかな時間と場所があるという事の大切さ。」

3 月 11 日以降、追い出しコンパでもこの話題（震災について）をしたと思うが、あの頃は何が出来るか全然わからなかった。GW に先生方と車で東北の被災地を回って、城山から大槌の市街地を眺めて、その時初めて被災者の方とお話しする機会がありこの街だったらなにか力になれるかも知れないと感じた。GW 以降何が出来るか具体的に分からないまま、研究室の有志と一緒に何度も大槌に行き、色々な人に話を聞いた。しかし、漁師の人と話していても会話が成立しないというか、彼らの価値観と私が今まで持ってきた価値観が全く異なるという事は分かるが、この人達に合ったまちづくりとは何かが分からないままなんとなく大槌に通い続けている期間が続いた。

9 月 15 日は赤浜小学校の体育館で住民との打ち合わせをして、地域の方々が初めてまちづくりをやってみよう、プランを作ってみよう、ということになった日であった。それまでは、なんとか支援しようと考えていた意志と地元の意志と掛け違えた感じであったが、この日は通じ合えたように感じた瞬間があった。

そして、体育館から出てくると夕方で紫色の空気が漂い、赤浜小学校のグラウンドからは堤防がなくなった大槌湾が望め、すごく穏やかな時間がそこにはあった。その穏やかな時間とは、例えば子供たちがグラウンドで野球をしていて、老人たちは自衛隊が作った仮設のお風呂から上がって、一杯やっているというように、この空間には赤浜が被災する前は、恐らくこういうコミュニティがあり、こういう時間が流れていたんだなとすごく実感することができた瞬間であった。穏やかな時間・場所というのはこんなに貴重で、そのために私達はまちづくりをやっているんだなと思えた。

私達が話している被災者の方々はものすごく傷つき、大切な人を失う経験をしているという事や、穏やかな時間・場所がある貴重さを私達は忘れがちである。彼らには 3 月 11 日への思い、過去に対する思いがずっと重く在ったが、穏やかな時間・今まさにここ、という事の大切さを赤浜の皆さんはもう一度未来に向けて取り戻そうとしているように感じた。

過去を忘れてしまうのではなく、過去を意識しながら未来に向けてまちづくりをしていくというこの仕事の重さや意義というものを、この空気感の中で感じることができ、本当に忘れられない一瞬となった。

これ以降ありがたいことに、復興コーディネーターの仕事を与えていただき、ここのところ二週間に一回現地に通っている。その一回一回の会議は本当に重く、一瞬でも無駄にはできないという、このコーディネーターという仕事のありがたさをかみ締めている。

来年もよろしくお願いします。

拝啓 研究室のみなさま

パリ滞在中の永瀬先生より Bonjour!!

An Essay by Mr. Setsuji NAGASE (assistant prof.)

昨年 12 月より研究のため渡仏した永瀬助教に、現地での生活をレポートして頂きます！

永瀬 節治 助教

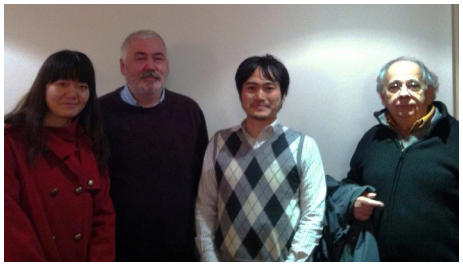
Letter from Paris...

私が滞在する国立科学研究センター（CNRS）の研究室は、パリの東に隣接する Charenton にあり、ソーシャル・ミックスにより共同住宅と複合化された建物に入っています。建築・都市計画・社会研究室（Laboratoire AUS）という名の通り、ボナン教授を筆頭に政策・社会学を含む多分野の研究者が、大学との兼任で所属しています。私も何人かの先生をご紹介いただき、会合にも参加させてもらいながら、ル・アーヴル復興計画の研究を進めています。

セーヌ河口の港湾都市ル・アーヴルは、第二次大戦で壊滅的被害を受けた後、60 年代にかけて街区再編と RC 造・プレファブ化による革新的な住宅システムのもとで復興され、2005 年に世界遺産に登録されています。都市に新たな形が与えられる中で、戦前の記憶やアイデンティティがいかに据えられていったのかが、私の関心の中心です。

パリでは図書館・資料室が充実していますが、やはり圧巻は新国立図書館です。セーヌ川を望むデッキの広場も爽快ですが、中庭の森を取り囲む閲覧室は、研究に最適な静穏かつ上質な空間が確保されています。

滞在も折り返し点を過ぎ、冬でもカフェが賑わい、散策欲を喚起する街並みの雰囲気も日常になりつつありますが、残された日々、存分に吸収したいと思います。



▲CNRS の研究室にて。左に Bonnin 教授と中国からの留学生 Wang さん、右は Douady 教授。

▲ル・アーヴルの街並み。1946 年からオーギュス・ペレを中心とする建築家・都市計画家チームにより 20 年もの歳月をかけて再建。

▲新国立図書館（ドミニク・ペロー設計）。デッキの広場から対岸のベルシー公園へは歩行者橋が架けられ、都市デザインの力を感じる。

プロジェクト報告

プロジェクトのためなら、年末年始も動きます！

Reports on field investigations carried out by two projects at the year end & years holiday!

昨年末に行われた鞆 PJ と、年をまたいでの滞在となったルンビニ PJ の現地調査の様子をお伝えします。

鞆 TOMO-project プロジェクト

環境デザイン研究室 M1 馬場 弘樹

昨年末、窪田先生、M1 北川・馬場の三名で鞆に現地調査に行きました。私達はこれまでに鞆の空地がどのように分布していて、どのような利用がなされているのかを歴史・空間的に分析しており、今回はその空地の所有の関係まで踏み込んで調査しようという事で、主にヒアリングを行いました。

しかし、いざ現地に行くと寒い事もあり、殆ど外には人がいませんでしが、かろうじて通りがかりの人に声をかけることができると、皆さん笑顔で嫌な顔ひとつせず答えてくれます。鞆っていいなと思う瞬間です。結果的に、多くのお話を鞆の方々からお聞きすることができ、寒かったけれどとても楽しい調査になりました。

▲空地を活用した庭園

▲空地の井戸に興味津々の窪田先生

ルンビニ LUMBINI-project プロジェクト

M1 仲村 貴文

▲子供たちに囲まれる黒瀬助教

▲仏教団体関係者と打ち合わせ

年末年始を利用し西村先生、黒瀬助教、M1 石黒・仲村の四名で現地調査と関係機関との話し合いを行ないました。具体的には、周辺の仏教遺跡である Tilaurakot(仏陀出家の地) と Ramgrama(唯一掘り返されてないとされる仏舎利塔が眠る地) の保全開発規制の提案に向けて周辺の村落からの眺望調査や、新交通についての提案をし、我々が議論の的になると予想していた電気自動車とボートの導入に関してはすんなりと受け入れられた一方、ルンビニ内を走るルートに関しての議論の方が白熱し、海外 PJ の難しさと面白さを体感できたと思いました。現代までの数千年の時代の変化を考えると、地域の今後の在り方を左右する我々の調査の重みを感じました。

Information

1 月の予定

1 月 20 日	研究室会議　17:30 ～
1 月 21 ～ 22 日	大槌現地調査

編集後記

石井 かおる

私の 2011 年は入学からの忙しさでバタバタしている間に終わってしまいました。でも、そんな忙しさの中にも小さな幸せは沢山転がっており、昨年はプチトマトを食べて癒されておりました。プチトマト一つで笑顔になれるなんて、つくづく自分は単純。2012 年も日々の小さな幸せを大事に、感謝の気持ちを忘れず GO!GO! 本年もよろしくお願い致します☆